

五つの赤い風 船 高田渡
高石ともや 遠藤 賢司 加川良
中川五郎 中 はっぴいえんど
友部正人 友川
かずき 安田南 津
あがた森魚 かま やつひろ
岡 シバ 林 フォ 信 康
シバ ヤン 休み の国
六文銭 ザ・ディ ワラン
浅川マキ 藤
ジャックス なぎ 哲夫
ら健志 はちみつはい 乱魔堂
吉田 拓 郎
中川イ Vol.2 サト 拳大貴

HOTORO JAMBOREE Vol. 2

前口上

前回から 3 か月ほどのご無沙汰でございます。江戸時代には天下の台所、現在は地方分権の急先鋒として天皇なき都さえ生みだしかねない街大阪の、経済を担っているベッドタウンの小さな一室から不定期で送りしております気ままな混血音楽評論雑誌「ひとりジャンボリー」の 2 回目でございます。現行憲法では「都」の概念が明確に規定されていないために天皇、政治、経済など取り上げる観念によって複数都がアリナシになってしまう現状は皇室ファンの私にとっては憂うとまではいかないにしろ、ちょいと注目している訳でございます。全くの無知な私であるので動向を窺うばかりですが。一応大学では統計学を専攻しておりまして理系でございます。

関係ない話はこのくらいにしておきまして。前回の Vol.1 は感想も非常に多くいただきまして嬉しい限りでございます。反響・激励・要望・不満を踏まえましていくつかマイナーチェンジも致しました。その点についての言及は後口上の方に任せるといたします。

前回からの身の回りで起こったアレコレなのですが、毎年 9 月に開催されるくるり主催の音楽フェスティバル京都音楽博覧会が今年から実施する、ソロステージ企画の名前が「京都音博名物ひとり・ジャンボリー」と発表されました。...取られた！後出しジャンケンや！このタイトル気に入ってたーのにーん。と若干凹み気味です。だけどとりあえずまだこのままで頑張っていきたいなあと。もちろん本誌の方が「くるりのアレから取ったんですか？」と言われかねませんが、そこは面倒臭がらずに「こっちが先なんです!!!!」

今回も前回と同じ構成をとらせていただきました。特集は「25 周年記念！The ピーズのここ 10 年」と題しまして、デビュー 25 周年、活動再開 10 周年を迎えた The ピーズの特に 02 年の復活後に主軸を置き語っていきます。というのも今売りのロッキングオン・ジャパン 8 月号の JAPAN REVIEW 欄に「The

ピース、25 周年に寄せて—自分史の中でしか語ることのできない The ピーズの物語」という私の書いた記事が掲載されております。それに便乗、否勝手に連動いたしましての企画というわけです。ジャパンの方はピースにハマったきっかけやら、ライブレボなど熱っぽく

ひとりジャンボリーです!!!

○特集「25 周年記念！

The ピーズのここ 10 年」

前述しましたように今売りのロッキングオン・ジャパンのジャパン・レビューにもピース 25 周年に寄せた文章を 2 ページにわたって掲載させていただきました。本項はより冷静に深くピースの曲、はるのソングライティングについて掘り下げていきたいと思っております。

基本情報をざっくり記しておくとして The ピーズは 87 年にはる（大木温之 / Vo・B）、アビさん（安孫子義一 / G）、マスヒロ（後藤升宏 / Dr）の 3 人で結成。バンドブームの煽りもありつつバカロックの一翼を担い 89 年にはビクターよりメジャーデビュー。1st アルバムは 2 枚同時リリースということからかなり期待を受けてのデビューだが、当時は双子の弟である大木知之（現トモフスキー）率いるカステラと音楽性の上でも常に比較されていた。このアルバム発売後まもなくマスヒロが脱退し、ここからドラマーは安定せずそのつどドラマーの力量に合わせた曲を作らざるをえなくなる。バンドブーム終焉後も継続してその退廃的文学的と称される歌詞や 3 ピースならではのストレートなロックンロール、はるの不安定でヒリヒリとする人柄などで一部から熱狂的な支持を集める。96 年にはキングレコードへ移籍するがアルバム「どこへも帰らない」発表後、長年連れ添ったアビさんが脱退し、その後を追うようにしてはるは 97 年「リハビリ中断」を最後に活動休止宣言。飲食店のバイトなどでギリギリ生計を立てる。音楽家としてほぼ廃業状態だったが 01 年にベストアルバム「ブッチーメリー」をはる自身の選曲で 2 枚同時発売、復活の機運が高まる中 02 年のロック・イン・ジャパンにてはる、アビさん、そして活動休止以前もサポートしていた経験があるシンちゃん（佐藤シンイチロウ / Dr）が the pillows と兼任で加入し復活。今に至る...

というのがおあつらえ向きのピース史である。詳しい歴史についてはウィキペディア等々で見たい。ということでここからが本題。痛いほどに退廃的な歌詞、時には性をもあっけらかんと歌う。これらは活動休止前に最も言われていた魅力である。いや、今はこの傾向が見られなくなったという訳ではないが、今のはるでは代表曲である「日が暮れても彼女と歩いてた」や「シニタイヤツハシネ～born or die～」のような曲は作らないだろう。そこで今回は復活 10 年ということで活動再開後のピースに絞って「今に至る...」の部分を詳しく総括したいと思う。

まず 02 年以降の 10 年を活動スタイルで大きく分類すれば復活から 05 年「赤羽 39」までのキングレコード期。そして 07 年のシングル「アル中」以降現在も続く自社レーベルたまぶくロカビリー倶楽部期に分かれる。キング期では 3 枚アルバムを残しているが、音楽性は活動休止前のキング期をおおよそ引き継いでいる。しかし姿勢としてはこれまでの活動を思い出すアイドルリング期間および、つまんなかったらまたやめればいいしのような試用期間といわんばかりにゆるく、待ち望んでいたファンを興奮させるのではなく安堵させるようなものである。03 年復活第 1 弾となったその名も「The ピーズ」では僕たち変わってない

でしょ？というようなシンプルロックンロール、ベーシストの作曲ならではのコード感に寄り添うままのメロディ、終わってる歌詞、アビさんの荒々しくも美しいトーンを響かせるギター、はるの歌うベースライン。これまでと何も変わらない部分にシンちゃんのドラムが加わり長年ピーズの弱点だったリズム面に不安はなくなった。また終わってる歌詞といえども再びバンドが出来るという嬉しさが見え隠れしてしまっている。『ひとりくらい』なんて曲は前までははるだったら「誰もいない」と歌っていたはずだ。このアルバムの最後を飾る『グライダー』でピーズは10年前の過去も10年後の未来も肯定している。活動休止以前の自己を削り取る曲作りから、削り取ることもめんどくさくなったような諦めの境地に入り客観性と自己哲学の表現もおどろくほどの成長を見せている。

そこから04年「アンチグライダー」ではこのタイトルや『ギア』の歌詞であっさり前作を象徴する楽曲『グライダー』に対するアンチを表明してしまう。しかし、これも前作の出来に対する否定ではなく「ちょっと前は浮かれちゃってかっこつけちゃいました。」というニュアンスと、人が言うことだから矛盾もつきモノであるという相変わらずの飄々としたスタンスが感じられる。

続く05年「赤羽39」収録の「体にやさしいパンク」ではもたれたハネノリビートがはるのかき鳴らすベースを契機にピストルズばりの突っ込んだパンクに変貌する。『サマー記念日』ではほのぼのと進んでいくが突如転調をしてまたしばらくすると戻ってくるピーズ流『オブ・ラ・ディ・オブ・ラ・ダ』。ポール・マッカートニーフリークのはるでないと成せないビートルズチックな曲である。歌詞においては「しんどそう」「くたびれきった」「グッタリしたいぜ」など中年バンドながらの身体の疲れが感じられることと、一見したところでは意味のとりにくい抽象的な言葉の羅列が並ぶ。しかしそれが気持ちのいい、いわゆる「はる節」なるものが完成されていくのもこの時期である。しかし『ノロマが走って行く』『クリスマス』など鮮やかに心象風景が描かれているものもあり、この奇妙なバランスがこの「赤羽39」を名盤に押し上げている。

はる、アビさんが40歳という節目を迎えた05年。ライブはこれまでと変わらぬペースで行っていたにもかかわらずリリースが途絶え、ようやく新曲として発表された07年の「アル中」からはキングレコードを離れることになる。この『アル中』だが近年のピーズでは珍しくまさしくアル中のように弾くのもだるそうなベースが体現しているようにどんよりとしており、活動再開後の歌詞にはそれほど見られなかった「フルチン」「マスかいてろ」「チンカス」といった初期スタイルであるドギツイ性の言葉も復活している。

この『アル中』以降6枚のシングルを発表するが、『ゲロサーフ』『三連休』など疲労や体調悪いことを歌ったものや『ロンパリンラビン』や『バカのしびれ』『でいーね』など歌詞世界がニュアンスに囚われる傾向がより一層強まっている。それらの楽曲がまとめられたのが今回発売されたアルバム「アルキネマ」である。THE BLUE HEARTSを解散したヒロトとマーシーがハイロウズを結成し、鳴らした音が歌詞がメッセージ性を意図的に削いだものであったように、この『アルキネマ』の中にはかつてのヒリヒリするようなしんどい曲はなくなった。同時に発売された5年前の20周年ライブDVDを見てもはるは今とっても幸せそうに音を鳴らしている。

これまでの楽曲では『実験4号』で「続くよ まだ二人いる」と歌ったが本当は続かないこともわかっていて、『君は僕を好きかい』では「君は僕をたまに見ている 君は僕を好きかい」と聞いたが本当は他のヤツのことを好きだということもわかっていて。以前の「はる節」はわずかな希望もとうに失っていることを知りながら歌っているもんだから聴く方もはる自身もしんどいに決まっている。

しかし今回「アルキネマ」に唯一の新録として収められている『幸せなボくら』で初めてはるは幸せであることを歌った。93年の代表曲『日が暮れても彼女と歩いていた』の中で「どこのだれがホントに幸せなんだ

ろーか」と歌っていたはるがようやくピースとして幸せであることを歌うことが出来たのである。25 周年を迎えてこの期に及び動員も伸びつつある The ピーズ。今後は 7 年ぶりとは言わずにもう少しアルバムのインターバルを短くしてほしいところだが。シンちゃんも本業である the pillows が少しだけ休憩することが 7 月 1 日に発表され、しばらくはピースの方に力をいれることになるだろう。まだまだ注目しなければ。
『アルキネマ』

The ピーズ

たまぶくロカビリー倶楽部

TRC-0017

2012/7/4

『20周年LIVE at SHIBUYA-AX』(DVD)

The ピーズ

たまぶくロカビリー倶楽部

TRC-0016

2012/7/4

外部リンク

・公式 youtube チャンネル「たまぶくロカビリー倶楽部」

<https://www.youtube.com/user/tamabukurockabilly>

・公式ウェブサイト「The ピーズ-たまぶくロカビリー倶楽部」

<http://www.thepees.com/>

○新盤ディスクリビュー

ユメオチ「これからのこと」

今年の 4 月に発売されたユメオチの 1st ということで発売から少し日が経っておりまして新盤として紹介するのには少し遅いですがあまりに素晴らしすぎるので紹介せずにはいられません。

ユメオチは下北沢のモナレコードの店主でもある行達也 (p) を中心として梅林太郎 (gt)、森川あゆみ (ba)、ドラマーの梅田順一 (dr)、寺岡歩美 (vo)、宮下大輔 (ps) で構成される男女 6 人組。性別も世代もバラバラ 6 人が鳴らす音楽は「喫茶ロック」と称されるもの。このジャンルは少し説明が必要だろう。喫茶店の BGM としても心地よく聴けるようなフォーク、ボサノヴァ、シティポップといった穏やかで曲群を括った二次的ジャンルである。曲がかかっている間は会話をもちろん、新聞・雑誌のページをめくる音さえ憚れるような 60~70 年代的ジャズ喫茶でかかる音楽とは違い、会話の邪魔をしない、音が右から左へ通り抜けてしまうように心地いい。そんな日常に寄り添った音楽であるが、ともすれば取るに足らない音楽とも思われかねないこのジャンルの正しさについての問題は置いておくとする。しかし良い意味としての「喫茶ロック」は帰納的に定義すれば腑に落ちるだろう。古くは京都三条のイノダコーヒーが舞台の『コーヒーズブルース』を歌った高田渡や「風街」という現実には存在しない街の原風景を表現したはっぴいえんど、90 年代後半以降では初期くるり、キリンジ、キセル、辻香織などアーティストを挙げていくとぼんやりと「喫茶ロック」外観が見えてくる。

しかし近年の音楽市場の細分化やライブ重視によって喫茶店を会場にした極めて少人数に対してライブをすることもトレンドになり、もはや当たり前のスタイルになりつつある。音響設備や音量の制限がある喫茶・カフェではおのずと音楽の方向性も決まってくる。60年代～70年代フォークを経験した世代は懐かしく、私たちのような若者にとっては物理的な、また音楽的な距離の近さに新鮮さを持って驚く。このようにBGMからより日常に溶け込んだ生演奏へと「喫茶ロック」の潮流も変わってきているのではないだろうか。

「喫茶ロック」の概観を理解していただいた上で話をユメオチに戻すとしよう。全8曲共に宮下大輔によるペダルスティールの音色が効果的にフューチャーされているアコースティックサウンドである。『若き日の思索のために』はエレキギターが軽快なリズムを刻み、清涼感溢れるサビから流れるように日が暮れゆくCMへ。ある夏の日を舞台にしたようなCMにぴったりなJ-POPサウンド。『さよならをおしえて』（外部リンク動画1）は荒井由実、大貫妙子、山本潤子など女流ニューミュージックを彷彿とする。『ピクニック』ではブルーグラス的アプローチと全員による歌唱が微笑ましい。『悲しみよこんにちは』（外部リンク動画2）ではマンドリンを弾く宮下と寺岡が交代で歌い繋いでいくフォークで牧歌的な様子がふと高田渡が率いたジャグバンド武蔵野たんぽぽ団を思い出した。みんなで笑いながら日々の愚痴や皮肉を言い合う様子がまた楽しい。『そらいろのたね』（外部リンク動画3）はラストにふさわしく曲全体がこのアルバムの余韻そのものになっている素朴な味わいの佳曲である。驚くべきはゆるやかに一番を終えたとマンドリンのソロと共に手拍子とタンバリンがはいってくるのである。一般的に一体感や高揚感を煽ることが多い中でアンバランスに寂しく鳴るこのような手拍子を私は聴いたことがない。

少ない曲数ながらも振り幅は広く全体を包む多幸感に反して、歌詞はすでに宴を終えて一人で虚無感に苛まれている様相であるところがチクリとさせる。しかし聴いた後に歌詞の切なさは残らず、聴き終えてしまうことを惜しみながらも淡々と次の行動に移ることが出来てしまう。この日常における無害な印象は寺岡歩美の声に因ることが多い。感情を封じ込めることで聴取者により感情を類推させるような歌唱法は森田童子を思い起こさせる。青葉市子、Y e y e、mmm（ミーマイモー）、平賀さち枝など現代の女流アーティストが次々と出てくる中でユメオチもその中にカテゴライズされるかもしれないがこの感情の機微のつかみにくさは新しいストーリーテリングの形かもしれない。

私たちの日常における感情の起伏などささいなものだ。ただそんな中にもたまに「なんかいい」と思える瞬間があるだろう。これがたまらなく愛しくて生きているのである。そんな何も無ければつまらない、しかし突拍子の無いものだと思え向きで大袈裟になってしまう。日常を歌にすることはとても難しい。そんな中でユメオチの音楽は本当に日常であり、だからこそBGMに足りえる「喫茶ロック」としても機能する。ユメオチのような音楽を愛おしいというのだ。



『これからのこと』

ユメオチ

エンガワ

ENGW-005

2012/7/4

文中外部リンク動画

1 ユメオチ『さよならを教えて』PV - YouTube

<http://youtu.be/RPrbe-bkpkM>

2 ユメオチ『悲しみよこんにちは』 - YouTube

<http://youtu.be/r57WBJqCZYk>

3 ユメオチ『そらいろのたね』 - YouTube

<http://youtu.be/92waV-p8X3s>

外部リンク

・ yumeochi ユメオチ official web site

<http://yume-ochi.com/>

○無差別中古旧盤レビュー

エサ箱より愛を込めて…。

このコーナーも第二回ということで今回も中古で購入した旧譜の中でビビッと来たものを棚からひとつかみ（フロム山下達郎）していきます。前回はそれこそざっくばらんに三枚取り上げましたが、旧盤な上に何の脈絡もない三枚だったので「なんで今これを取り上げたのですか？」、「SKE 48 好きなんですか？」や、また「ソウルフラワーファンなのでそこしかよくわからなかったのですがヤポネシアンの記事は面白かったです」というご意見（括弧内筆者誇張表現多大）いただきました。前者の回答といたしましては「とにかく大好きな三枚です」としか言えません。さらに後者の回答に代えさせて頂きましては、今回から制約って程のものではないですがある種の括りを設けます。しかしこれも後付けになること必死なのですが、記事それぞれがガラパゴス化しているのを無理やりに一まとめにしておこうという結果帰着した考えであります。

ということで今回は「ガールズ・ポップ・アイコン三種盛」と題しましてお送りいたします。

『ア・キャンプ』

ア・キャンプ

ストックホルム・レコーズ（ユニバーサル）

UNICO-1020

2001/8/22

90年代中盤に巻き起こったスウェディッシュ・ポップを代表とするバンド、カーディガンズのボーカルであるニーナ・パーションのソロプロジェクト「ア・キャンプ」の1st。

カーディガンズはシルヴィ・バルタンやクレディーヌ・ロンジェのような 60 年代フレンチ・ポップスや 90 年代当時隆盛を極めていたパワー・ポップなどに影響を受けたアンニュイな音楽性で人気を博したバンドだ。しかし彼らにとっての 01 年は一転してヘビーロックを取り入れ、よりバンドサウンドに力を入れた 98 年の「グラン・トゥーリスモ」をリリースし、03 年の「ロング・ゴーン・ビフォー・デイト」までしばらく休止をしている時期にあたる。「グラン・トゥーリスモ」以降ニーナもレトロでコケティッシュな声から声量あるロックボーカルに年々変化していったことから戸惑いを覚えた人も多かった。その過渡期にあたる本作はニーナの甘いヴォイスが堪能できる最後のアルバムと位置付けることが出来る。サイドプロジェクトならではの息抜きの要素も強いのだがニクラス・フリスク（アトミック・スウィング）、マーク・リンカス（スパークルホース）、そして後に彼女の夫となるネイサン・ラーソン（シャダー・トゥ・シンク）など名うてのミュージシャンを迎えカーディガンズよりも自由度の高いポップミュージックを奏でている。先行シングル『アイ・キャン・バイ・ユー』（外部リンク動画）に代表されるレトロで牧歌的なカントリー調はカーディガンズでは聴けない、なおかつラフな内輪ノリでは決してない大衆性の高さを示した新機軸のポップスだろう。

「カーディガンズのニーナ」というイメージからの脱却を図ったり、カーディガンズでは出来ないことを模索するわけでもない自然体なアルバムだが結果としてカーディガンズ次章への橋渡しとなっているという見落とされがちな好盤である。

このような位置づけや、ネイサン・ラーソンとニーナが結婚したことからこの一作のみで自然消滅したかと思いきや 09 年に再び終結し「コロニア」というアルバムを出している。前作から 8 年が経ち、よりアダルトな煌びやかさとアコースティックサウンドを打ち出している。

なお本隊カーディガンズは今年のサマーソニック 12 で久しぶりの来日が予定されている。

・外部リンク動画

A Camp - I Can Buy You [Official Music Video] - YouTube

<http://youtu.be/K5ZuFGdYF6s>

『真夏の Sounds good!』

A K B 48

キングレコード

K I Z M 9 0 1 5 1 / 2 （初回限定盤 A）

あ、ちなみに総選挙投票はしておりません（笑）これだけ盛り上がって売れている恩恵（弊害）に便乗しまして中古盤を格安で入手させていただきました。もちろん握手券も投票券だけきれいに抜かれており外のフィルムでさえまだ付いている状態でした。ありがたい。しかし投票・握手が目的ならば何故値段の張る DVD 付を購入するのでしょうか。少し疑問...

前回の S K E に引き続き取り上げるってことで「てめえ大好きだな？（笑）」という含み笑いを伴っての侮蔑を浴びているのです。しかしよく言われているように「A K B グループはギミックの革新性に対して曲は保守」という傾向からまれにはみ出た曲を見つけたときの喜びはこれ一入なのです。

本題へ入ろう。表題曲の『真夏の Sounds good!』（外部リンク動画）は 80 年代ニューミュージックを彷彿とする少し懐かしいサマーソング。A メロのコード進行がほとんど太田裕美の「木綿のハンカチーフ」と類似していることもこのニューミュージックの雰囲気大きく起因しているだろう。

特筆すべきは初回限定盤タイプ A に収録されている『ちょうだい、ダーリン!』である。1 サビから 2 サビへ移行する下降フレーズ、バックで「アーヤイヤー」と流れる煌びやかなコーラス、間奏のマリンバ

風シンセソロとどこをとっても 60 年代アメリカンポップス。ロネッツやクリスタルズを彷彿とするようなまさにフィル・スペクターサウンドである。これを現代の日本のロック、ポップスのアーティストが安易に取り入れるとそのアーティストの持つ音楽性との兼ね合いが難しく、変に安っぽくなってしまいうだろう。山下達郎や小西康陽などその道に精通しているベテラン勢が説得力を持って作ることはじめて成立する音楽である。しかし音楽性によるジャンルを持たないアイドルという立ち位置では、ある種治外法権的に乗っかることでポップスにおける正しさを見出している。

アウトロ英詞部分での [kiss me kiss me baby] の発音が「ベイビー」と「ベイバー」で統率が取れていないのが少し気になってしまうがそんなことは帳消しにしてしまえるほどの名曲である。歌唱人数はスター座員 8 人 + 若手 2 人（「座員」や「若手」という言い方するのだろうか？）の 10 人構成である。シングルに入れるにあたってギリギリまで減らした人数だと思うがそれでも若干混沌としている印象を受ける。しかし『真夏の Sounds good!』は 32 人で歌っているし（本当に歌っているのかは未確認、否確認する手段はなし）、次曲『三つの涙』もかなりの大人数なので、この流れで聴くとかなりすっきり聴くことが出来る。もう一度言うが非の打ちどころの無い名曲。タイプ A をお勧めする。

文中外部リンク動画

【PV】真夏の Sounds good! ダイジェスト映像 / AKB48[公式] —YouTube

<http://youtu.be/oL0waWXWqal>

『Candy』

松田聖子

ソニー

MHCL 20153

2012/3/14

（オリジナルは 1982/11/10）

松田聖子 6 枚目のアルバムであり名実ともに無敵だった時代の一枚。私が所有しているのは今年に出た LP サイズ紙ジャケ復刻盤のブルー・スペック CD となっている。中古店で CD 棚には入らずどこに並べても座りが悪く、やむを得ずレジ前に「表示中古価格からさらに半額」と書かれて置かれていたところを保護。こんな名盤を邪険に扱いやがって！と怒り半分、さらに半額ありがたい！との感謝半分の気持ちを持ちつつ購入。買ったのはいいがやはり LP サイズなので案の定保存場所に少し困る。今回の再発された全タイトルは 09 年にもブルー・スペック CD で出ており同じ音質なので CD サイズの方が便利いいのかもかもしれない。違いは 09 年盤が DVD 付きで当時の歌唱映像『野ばらのエチュード』が入っているのに対し、12 年盤は『野ばらのエチュード』と『未来の花嫁』のカラオケが入っている。やはり今回はコレクターズ・アイテム要素が強いだろう。

アルバムの特徴を簡単に説明しておくとして作詞はもちろん全盛期なので松本隆、そして作曲には「風立ちぬ」以来となる大瀧詠一が 2 曲、そしてさらにはっぽいえんど繋がりである当時 YMO が人気絶頂の細野晴臣が初めて聖子作品を 2 曲手掛けている。YMO にとっての 82 年という年はサンプリングが取り入れられた 81 年「テクノデリック」と、テクノサウンドはそのままに『君に、胸キュン。』（作詞は松本隆）に代表されるようなポップな歌謡曲路線を推し進めた 83 年「浮気なぼくら」の間でありメンバーそれぞれ楽曲提供やソロ活動に励んでいた時期である。他にも財津和夫、南佳孝、大村雅朗（大瀧曲以外の 8 曲で編曲も担当）という聖子全盛期を彩った豪華メンバーが揃って曲を提供している。

前作「パイナップル」から半年という短いインターバルで発表されたが、アルバム全体を包む印象として

「パイナップル」は20歳になった直後でまだ大人になりきれていない背伸びの様子が感じられたが、本作「キャンディー」では細野、南という聖子作品初参加陣を中心に大人になった聖子を表現するような曲が並んでいる。特に南佳孝が手掛けた『モッキンバード』、『電話でデート』の2作は聖子独特の語尾が上がる歌唱法をこれまでは「かわいい」とされていたのを「大人の色気」として機能するようなメロディの運びがなされている。

多くのアーティスト、特にアイドルで顕著なのがアルバムの構成はそれぞれの作家が1曲ずつ提供する形である。特に近年は1つのアルバムを作るのに対し100~200の曲を集めてコンペティションで曲を選んでいくいわば「数打ちゃ当たる」方式であることも多い。しかし本作のように10曲を5人で作曲を回し、各人が数曲提供することでより自分の担当曲が埋没しないように高いクオリティの曲が集まり、アルバムの中で切磋琢磨出来る状況が生まれている。その最たるものの例として光GENJIの1stアルバム「光GENJI」がある。A面4曲がASKA作詞作曲、B面4曲が1曲CHAGE & ASKA、残り3曲CHAGE作曲となっており同じグループの二人がA面B面に分かれて曲を担当することでより「相方には負けられへん！」と高め合い名盤に押し上げている。

松田聖子も81年のアルバム「風立ちぬ」はA面が全て作曲編曲大瀧詠一、B面は全て編曲鈴木茂という布陣で制作されている。製作者をしぼることによる統一感が生まれることもメリットだろう。そんな中でこの「キャンディー」は各作曲者の個性も存分にだしつつ、アルバム全体がオムニバス作品ほどにばらついていない絶妙のバランスを保った名盤である。

後口上

「HITORI J AMBOREE Vol.2」今回も読んでいただきありがとうございます。

音楽に感情移入してしまうことはみなさん経験あると思いますが、その形態は大きく2つに分けることが出来ると思います。一つは意図的に曲の世界へ自己をエスケープすることにより、曲の持つ感情と同じくするというタイプです。世界に、日本にあまたあるラブソングはこの特性を活かすことで「共感」や「羨望」を得ているでしょう。方向で言うと聴取者→曲への逃避行動。そしてもう一つが自分の経験した感情・状況に合う曲を聴くことでかつての経験が蘇る、自然に心動かされてしまうタイプ。こちらは曲→聴取者の方向となります。

The ピーズというバンドの音楽は間違いなく人の感情に沁み入る音楽でしょう。しかし曲世界に浸る、自らの世界に曲が入ってくるのどちらでもなくお互いの領域には踏み込まない、しかし共に気にしている、モデルに表せるならば

聴取者 | ↓ ↑ はる ↓ ↑ | 曲

とでも書けましょうか。ピースの曲を全て受け入れてしまうのは辛すぎる。なので全面的に歌の中へ陶醉するというよりも曲の中のにいるはるを見る、そしてはる自身も聴取者に向けて話をする。この形態は他のアーティストではなかなか味わえない質感だと思います。ロッキングオン・ジャパンに本誌としばらく

ピース祭でお送りしました。これまで全く興味のなかった方には実の無い話だったかもしれませんが、そんな方も是非ご一聴を。

さて今回の「ひとジャン」ですが、大きな改善点として要所要所にそのアーティストの公式サイトや公式なものでしたら youtube 動画などのハイパーリンクを付けました。電子書籍ならではの利点といたしまして読みながらちょちょいと確認していただければなと思います。さらに新盤レビューのユメオチ「これからのこと」のジャケット写真はメンバーの行達也さん本人に掲載許可いただきました！このような感じで快く許可っていただけるのだなと感じると共に鼻息荒げるほどに嬉しい気持ちでいっぱいです。

さて次号ですが今回がインターバル 3 カ月以上とかなりかかってしまったので出来れば 2 カ月以内（私の夏休み期間内）を目標として発行する目論見です。また次号までにはデザイン面の発展も見せていけたらなと思っております。それではお時間となりましたまた次号でお会いしましょう。

H I T O R I J A M B O R E E

Vol.2

2 0 1 2 年 7 月 18 日発行

発行人 峯 大貴

ツイッターアカウント

@mine_cism

HITORI JAMBOREE Vol.2

<http://p.booklog.jp/book/53666>

著者： 峯 大貴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mine-cism/profile>

Twitter アカウント

https://twitter.com/mine_cism

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53666>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53666>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ